

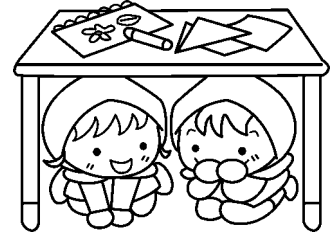


ひよこだより

都立葛飾ろう学校 乳幼児教育相談
令和6年9月2日 NO. 2

聞こえない・聞こえにくい子の災害対策

2024年8月8日宮崎県日南市で震度6弱の地震が発生しました。気象庁からも「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」が出され、不安な夏休みを過ごされた方も多いでしょう。災害による被害は正しい知識と行動で最小限に抑えることができる可能性があります。今回は、聞こえに配慮した防災について知り、できることから対策していきましょう。



【能登半島地震発生後の聴覚障害のある方たちの様子】

2024年1月1日、石川県能登半島で震度7の地震が起きました。大丈夫だろうかと心配していると、全聴協（略：全国聴覚障害教職員協議会）から「石川県立ろう学校の子供たちの中にも被災した子供がいて、少しでも心のケアができれば嬉しい。子供たちと遊びながら工作教室をやってもらえないだろうか。」という依頼がありました。相談を重ね、4月に全国の聞こえない・聞こえにくい教員と石川難聴児相談支援センターの一みみずくクラブと交流会という形で交流させて頂きました。

その時に参加された御両親やろう学校の先生から当時の地震の様子の話聞く機会がありました。石川県立ろう学校で被災された子は2名でした。その子の家族は、震災から一か月程度能登の避難所で生活されました。その間は、交通事情（道路寸断、車無しなど）により、ろう学校に登校することが困難でした。震災から1か月後、金沢市内のホテルで2次避難となり、ようやくろう学校への通学が可能となりました。月曜日から金曜日は、寄宿舎で生活し、土日は2次避難先となっているホテルで生活となりました。現在は、仮設のアパートからろう学校に通っています。寄宿舎で生活を始めた時は、友人に会えたことの安堵感と、またコミュニケーションもスムーズにできる環境になったことを大変喜んだそうです。

被災された奥能登には、聞こえない・聞こえにくい高齢者が利用している通所施設「やなぎたハウス」があります。地震の時、やなぎたハウスの利用者は、自宅近くの避難所にそれぞれ避難されました。しかし、音声による情報が分からない、知らない人とのコミュニケーションに困るなどの理由から、避難所で孤立してしまう状況がありました。孤立が孤独になると、心身を病む原因ともなります。そこで、富山県聴覚障害者協会が富山県へ働きかけ、「やなぎたハウス」の利用者を同じ避難所に集めて避難生活を送れるようにしました。聞こえない方たちにとって、非常時の情報保障があること、また長期化する避難生活の中でコミュニケーションがとれることの安心感が、いかに大切なことであるかが理解され、柔軟な対応が取られたケースでした。

石川県の大震災では、聞こえない・聞こえにくい人が最も陥りやすい「孤立」の問題について、石川県の方が一生懸命対策して頂いたことが、嬉しくもあり、安堵した出来事でした。

【備えあれば憂いなし】

災害発生時には、まず身の安全を守ることが大切です。1分1秒を急ぐ緊急時には、安全な場所に急ぎ避難することが、家族の命を守ります。そんな予期せぬことが次々と起こる災害時には、大人も心に余裕がなくなり、聞こえない・聞こえにくい子どもが側にいても、つい会話が音声中心となりがちです。

いざという時に、大人が落ち着いた行動がとれるように、日頃から写真やイラストカード、手話などを使って丁寧なやりとりを心掛けていくことが大切です。そして小さいからまだ説明はちょっと早いかなあと思わず、災害時には「このような状態だから逃げようね。」と、周りの様子や今からすることを分かりやすく伝えていけるとよりいいですね。そのためには、震度1～3ぐらいの地震がきたら学べるチャンスと思って、「今、地震がきてゆらゆら揺れているね。」「もし、ぐらぐら大きく揺れたら外に逃げるよ。」「火事になったら消防車がきて、火を消すよ。その時は逃げるよ」ということを災害時に使える手話を確認しながら、年齢に合わせて教えてあげておくとうれしいと思います。

聞こえない5歳の息子に「災害が起きて家に帰れない時は避難所に行くよ。」と話したことがありました。息子はすぐ「嫌だ。行きたくないー!」とかたくなに言ってきたのです。知らない場所での避難は、情報が入りにくいため、大人数の中に行くというのも気が引ける気持ちもあるのだろうなと思いました。可能であれば車の中や家で避難生活ができた方がよいのですが、どうしても避難所での避難生活をしなければならないときが来るかもしれない。避難所にも慣れてほしいなと思い、「そなエリア東京（防災体験学習施設）」というところに連れて行ってみました。実際の被災地や避難所の様子を再現した実物大のジオラマ展示があって、息子も「ひえ～こんな状況なら逃げるしかない。」とイメージしやすかったようです。首都直下地震特設コーナーでは、震災の様子を実体験できるのでとてもよい経験となりました。3、4歳ぐらいの子供にも分かりやすい内容になっているので、お子さんたちが分かる年齢になったら、一度体験に行ってみるのもよいと思います。

【防災バックの中身の見直し】

聞こえない・聞こえにくいお子さんがいる御家庭では、通常の防災バックの中身に加えて下記の物を準備しておきましょう。

- **補聴器の電池**...使用期限の確認を忘れずに。
- **防水ケース** ...補聴器や人工内耳は精密機械のため、水に弱いです。水濡れにより故障しても、災害時はすぐ修理に出すのは難しいため、防水機能のあるケースが安心です。
- **ノートやホワイトボードとペン**
...筆談や、子供のお絵描きに。
- **迷子札** ...緊急連絡先と名前を書いておきましょう。
- **ホイッスル** ...電池も不要で、子供でも使えるので、助けを求めるときに便利です。
- **聴覚障害者専用のバンダナ、ヘルプマーク（写真）**
...バンダナは荒川区聴覚障害協会にて購入可能です。ヘルプマークは区役所・福祉事務所で貰えます。



他にも家の近所や周囲の人の中に、子供の聞こえについて知っておいてもらえる人間関係を作っておくことも大切です。家族以外にも理解者がいることで、避難の際に、警報やサイレン等がわかりにくい子供に個別に声をかけてもらえるなど、避難先で必要な配慮や支援を得やすくなります。

大きな地震が起きた時は、その場その場に応じた臨機応変な対応が必要で、「こうすれば必ず安心につながる」と言い切ることができる対策はありません。なので聞こえない・聞こえにくい人が孤立する可能性が高いという状況を理解した上で、実際に地震が起こった時に慌てず情報共有できるように、日頃から家族と一緒に話し合っておきましょう。

(担当：番匠)